

新刊 Book reviews

□安曇野市市民生活部環境課・安曇野市版レッドデータブック作成委員会(監)：安曇野市版レッドデータブック A5. 429 pp. 2014. 安曇野市. ￥表示なし. ISBN no number.

安曇野市は長野県松本市の西側に隣接する地域で、安曇野、燕岳、常念岳、蝶ヶ岳を含む。2011年より動植物の専門家8名による委員会を組織し、調査と討議を重ねて本書とした。同県では、別に紹介する長野県レッドリストの改訂版が出版されているが、県内の地域的レッドデータブックはまだ少なく、市町村版としては本書が6番目とのこと。巻末に4頁にわたる英文要約がついている。

入手については少々手間がかかる。まず希望者は、電話なりはがきなりで下記へ申し込む。

399-8303 安曇野市穂高 6658, 安曇野市市民生活環境課穂高支所 TEL: 0263-82-3131, FAX: -6622, E-mail: kankyou@city.azumino.nagano.jp.

私は情報が欲しかっただけなのだが、先方から住所氏名を尋ねられたので伝えたところ、記入済みの振替払込用紙が送られてきた。加入者名は「安曇野市会計管理官」で、これによって送金すれば、入金を確認したうえ送付することである。そのうえ、払込用紙の記入欄には、会計処理用と思われるナンバーが記されていた。代金は本体価格が1,000円、送料164円、合計1,164円とのことで、税は含まれていないらしい。希望者側が振替用紙に記入・送金するやり方ならば、手間が省けるのに、と思うのだが、お役所が直接に金のやりとりをするのは、面倒なことらしい。奥付に口座番号や加入者名が示されていれば、お互い楽なのではないか？だいたい、領価の表示がどこにもなく、送料も税額もわからない。別掲の長野県レッドリスト植物編でも、購入についての情報はたいへん分かりにくい。

77-190頁にリストの対象となった植物342種類がカラー写真入りで解説されている。モウセンゴケやマルバマンサクが「絶滅種」と判定されているのだが、どうもシックリこない。広い面積が対象なら「広布種」として気がつかないが、面積を狭くとれば「絶滅種」が増えるのは当然、という気がする。県RDBでも、山口村が岐阜県に所属換えになったために、長野県のハンカイソウは

「絶滅」してしまった。小笠原が静岡県に所属換えになれば、東京都の沢山の貴重種は「絶滅」することになる。安曇野市もいくつもの町村を集成して市になったのだから、そういう経過を読み込んだRD種の評価が必要になるのではなかろうか？揚げ足をとるようで申し訳ないけれど…

ところで、本書の領価や申し込み法について、問い合わせて一ヶ月ほどして、安曇野市役所から電話をもらった。「まだ送金を受け取っていないが…」との問い合わせだった。あのナンバーは、やはり会計処理用だったのだ。「私は入手方法について質問したのであって、そちらが『念のために…』というので住所氏名を知らせたのだ。現品は既に入手している」と答え、「註文」は取り消してもらった。こういう成果品の領布は、出版社にまかせれば、お互い手数がかからなくてよいのに…と思った。

(金井弘夫 H. KANAI)

□西山 喬：山野草と語る、西山喬画文集. 解説・森和男 A4. 177 pp. 2015. 私版. ￥2,500 + 460(送料). ISBN no number.

著者のスケッチに添えた隨想と、森氏の植物解説が、見開き2頁のセットになっている。スケッチは黒のボールペン画で、原則1頁1種類、ときに複数種。中南米、ヨーロッパ、アジアを渡り歩いた78才の画家が、余命を知られ、抗ガン剤の服用もやめにして、好きで集めた植物をひたすら絵に描いて、描きながら湧き出る感慨を、文字に表すことに集中しようとする作品である。末尾の方になると、それまではなかった日付が記されるようになり、切迫感が募る。そういうタチの本だから、図鑑のつもりで手にしても、役には立たない。写真集では、こういう迫力は出せないだろう。入手希望者は森 和男氏へ(669-1401 三田市小柿 1348-10 TEL/FAX: 079-569-0780).

(金井弘夫 H. KANAI)

□西村幹夫、三村徹郎、西村いくこ、真野昌二(監修)；永野 悅、檜垣 匠(文)：植物細胞の知られざる世界 182×232 mm. xii + 91 pp. 2010. 化学同人. ￥1,800 + 税. ISBN 978-4-7598-1197-1.

英文表題の“*The Amazing World of Plant Cells*”の方が、和文表題よりもふさわしいと思う。中学のとき生物の授業で、ムラサキツユクサの花糸の毛を、研究用の顕微鏡で観察した。薄紫の球

の中を原形質がゆっくり流れしており、その中の微細な粒々がブラウン運動をしているのまでが見えて、すごく印象的だった。後年、自然系の専門学校で教えたとき、60人の学生の中で、中・高校の生物の授業で、顕微鏡を使ったことがある者は僅かに二人、それも固定標本だったと知って、自分の受けた授業のありがたさを、はじめて認識した。教師は、準備と始末に大変な思いをしたことだろう。子供に研究用顕微鏡を使わせると、観察するよりも機械や標本を壊す方が多いから…

遺伝子工学の進歩の結果、今日ではいろいろな細胞小器官(オルガネラ)を司るDNAが特定され、それぞれに特異な蛍光物質を組み込むことによって、生活に伴うそれら器官の役割や動きや変化を、多種多様な顕微鏡を使って観察・記録できるようになった。本書は、専門研究者しか見られなかつたそういう場面を、広く一般に公開して、細胞小器官の姿や役割を、理解してもらうことを目的としたものである。これら小器官は、かつては存在があること自体が話の種だったが、今ではその構造や変化や、生活上の互いの関係や役割が語られるようになった。

見開き2頁で一つのテーマを扱い、左頁には細胞一個か二個、あるいは、組織が貢いいっぱいにカラーで示されていて、まるでハッブル望遠鏡で、宇宙空間を覗いているようだ。画像の倍率は、400–700倍が30%，1000–5000倍が55%，1万–2万倍が9%。顕微鏡の種類は明視野、共焦点レーザー、微分干渉、蛍光、走査型電顕、透過型電顕と多種多様である。プラネタリウムを使ってこういう展示を工夫したらば、効果的な授業となるだろう。むかし、「ミクロの決死隊」という映画があったが、劇画もどきのストーリーを考えなくても、十分印象深い出し物になると思う。

右頁は解説で、細胞小器官やそれらが担う物質の動きを、漫画的な図と共に要領よく纏めてあり、門外の者でも、おぼろ気ながらも理解を深めることができる。

奇数頁右端中央に小さな円があるなと思ったら、これはパラパラ動画だった。1–45頁の22枚(引き算を間違えているわけではない!)は「染色体分離」、47–87頁の20枚は「ミトコンドリアの融合」の記録である。パラパラやれば動いているのは見えるけれど、なにせ図が小さ過ぎる。こういう学術書では初めての試みのようで、遠慮して恐

る恐る載せているように思えるが、直径12mmでは、折角の趣向も効果が弱い。この倍くらいの大きさの方が、迫力があるだろう。それにどういうわけか、頁の右端中央にしか載せられていないが、頁右端には上下にまだスペースがあるのだから、そこも利用すると、賑やかになるだろう。また、円形である必要もないと思う。

頁ナンバーが右端中央に、しかも飛び飛びにしか表示されていないのは、不便である。左頁は画像に敬意を払って、余計な文字は遠慮したとしても、一定のあるべき位置に、ページナンバーがある方が安心できる。

押し葉レベルの観察にとどまることが多い、分類や形態の研究者にも、こういう知識の裏打ちは必要なので、オルガネラや物質名、現象名の索引があるとよかったです。種属誌の議論の中に、こういう話題がとりこまれることは、そう遠い先ではないだろう。

(金井弘夫 H. KANAI)

□ハンス・モーリッシュ(瀬野文教訳)：**植物学者モーリッシュの大正ニッポン観察記** B5. 421 pp. 2003. 草思社。￥2,400 + 税。ISBN 4-7942-1238-0.

第一次世界大戦終了直後の1922–1925年に、新設されたばかりの東北帝国大学生物学教室で、植物生理学、解剖学の講義を行った著者の、日本観察記である。彼を招請するに当たって、大学は住居を用意したが、彼は教室の一角に造られたベッド付きの居間と応接間を好み、そこに寝起きして、日々の業務をこなすかたわら、あらかじめ計画してきた自分の研究を進めた。授業はだいたい午前中に済ませ、午後は近くの青葉山や広瀬川を歩いて、自然や風俗を観察し、毎晩遅くまで書き物をしていたそうだ。仙台高等学校の学生だった相馬悌介氏(19才)が、食事や生活の世話、講義や実験の準備、はては樺太から鹿児島までのすべての旅行にも同道して、面倒をみたとのこと。

本書は、彼が体験した日本人との交流ぶりをつぶさに記録し、我々には当たり前過ぎて気付かない日本の風習や生活態度を、欧州人に理解できるように記述していく。この点、大変好意的な日本の紹介となっている。彼はそういうことを、丁寧に解説してくれる人たちに囲まれていたのだろう。

けれどもどういうわけか、場面が知識階級との